

# 『マックス・ヴェーバーの犯罪』の英語圏とドイツ語圏での出版

羽入辰郎<sup>1)</sup> \*

1) 青森県立保健大学

**Key Words** ①マックス・ヴェーバー②タルコット・パーソンズ③Max Weber  
Gesamtausgabe

## I. はじめに

研究代表者は1993年に、ドイツの学術誌 *Zeitschrift für Soziologie* に拙論を上梓し、ヴェーバーが古英訳聖書を実際には見ていなかったこと、実は全て NED (*A New English Dictionary*=OED の前身) の calling の項目に引用されていた用例を孫引きしていたことを論証。また、その翌年1994年には、フランスの学術誌 *Archives européennes de sociologie* に拙論掲載。『倫理』論文においてヴェーバーが使ったルター聖書は、本物のルター聖書ではなく、「現代の普及版のルター聖書」に過ぎないこと、したがって“Beruf”-概念に関するヴェーバーの論証は崩れることを論証した。一方、その間、「歴史的-批判的全集」であることを謳った *Max Weber Gesamtausgabe* (以下 MWG と略) は続々と刊行されていた。「歴史的-批判的全集」であることを自称する以上、当然そこではテキストとそこで用いられている資料との厳密な批判がなされるはずであった。

他方、我が国では筆者は、2002年、ヴェーバーが資料の改竄に基づいて『倫理』論文を書いたことを論証した拙著『マックス・ヴェーバーの犯罪』を上梓した。東京大学名誉教授折原浩氏との間に、いわゆる「羽入-折原論争」が起こり、ネットは炎上した。折原側に与した丸山尚士はドイツに向かい、ヴォルフガング・シュルフターに報告。丸山によれば、シュルフターは丸山に対し、「静かに、静かに」と。(この時点において、シュルフターは日本で何が起きているかを正確に知っていたことになる。) 2008年、筆者は沈黙を破り、二冊目の拙著『学問とは何か-「マックス・ヴェーバーの犯罪」その後』を刊行。折原氏の四冊の本の論拠を全て叩き潰し、「羽入-折原論争」は終息。

2014年、MWGでの『倫理』論文の出版が迫ってきたが、出版社が決まらぬため、電子ブック Kindle eBook で出版。同時に、プリントアウトのコピーを世界の主だったヴェーバー研究者と学術誌編集部へ発送。その一部はシュルフターにも送られる。その一か月後に刊行された MWG は、Editorischer Bericht において、ヴェーバーが「現代の普及版のルター聖書」しか使っていなかったことを認め、脚注において、「最初に研究されたのは Tatsuro Hanyu によってである」と記した。

## II. 目的

『職業としての学問』を学生たちに説き、学者の鑑とまで崇められてきたマックス・ヴェーバーが、彼の代表作『倫理』論文において詐術を働いていたことを世界に明らかにすること。

## III. 研究方法

---

\*連絡先：〒030-8505 青森市浜館間瀬 58-1 E-mail: t\_hanyu@auhw.ac.jp

MWG 以上に、テキストとそこで用いられている資料との徹底的な批判的手法を用いた。資料による検証は、学問の基本的作業のはずである。ところが、従来のヴェーバー研究ではこれがなおざりにされた。学問の基本に徹底的に立ち返ることを目指す。

さらにドイツ語版だけでは黙殺される可能性があるため、早急に英語版を作ることが必要とされた。幸い、本学は英語のネイティブ教師には恵まれており、ヴィッキー・ウィリアムズ氏とクリストファー・ホーン氏に依頼し、筆者が英訳した英文のネイティブチェックを行ってもらった。筆者の英語は、ドイツ語に駆逐され、かなり錆び付いていたが、何とか英語版を完成させることが出来た。

#### IV. 考察

英訳によって意外なことが分かった。英訳に際しては三種類の英訳、パーソンズ訳、ベア&ウェルズ訳、カールベルク訳を用いた。驚くべきことに、パーソンズはヴェーバーにとって不利な注、不都合な省略記号等を、何らの訳者注も付さずに、全て削除していた。そして他の二つの訳も、概ねパーソンズに従っていた。つまり、英語圏の読者は、英訳で『倫理』論文を読む限り、ヴェーバーの誤魔化しがどこにあるのか、全く分からないことになる。これは世界で初めての発見である。英訳で発見し、加筆した部分は、全て独訳し、ドイツにいるウテ・ヴィーラント氏に送り、ネイティブチェックしてもらった。さらに、元マックスプランク研究所所長ハルトムート・レーマン氏よりドイツの出版社ペター・ランク社の編集者を紹介してもらい、英語版とドイツ語版を同時に出版することになった。

本研究はドイツ社会学に対してばかりか、アメリカ社会学にとっても致命傷を与えることになる。アメリカ社会学にとって、パーソンズは父であり、ヴェーバーは祖父に当たる。残念ながら、二人とも嘘つきだったのである。

#### VI. 文献

Hanyu, Tatsuro, 1993: „Max Webers Quellenbehandlung in der *Protestantischen Ethik*. Der ‚Calling‘“. In: *Zeitschrift für Soziologie*, Jg. 22, Heft 1, Stuttgart: F. Enke Verlag, SS. 65-75.

Hanyu, Tatsuro, 1994: „Max Webers Quellenbehandlung in der ‚Protestantischen Ethik‘. Der ‚Berufs‘-Begriff“. In: *Archives européennes de sociologie*, Cambridge: Cambridge University Press, Vol. XXXV, Nr. 1, Mai: SS. 72-103.

羽入辰郎, 2002: 『マックス・ヴェーバーの犯罪—「倫理」論文における資料操作の詐術と「知的誠実性」の崩壊』(ミネルヴァ書房)。

#### VII. 発表 (誌上発表、学会発表)

著者校正は三回のみなので、現在原稿の最終チェックの段階。